

『仏法の作法』

Research Materials

松尾恒一

〔解題〕

本誌前号に続く、いざなぎ流太夫小松豊孝氏記の、いざなぎ流祈禱資料の紹介。本号には、『仏法の作法』を翻刻する。楮紙に墨書された袋綴じ装の本資料は、墨付き四二丁、縦二八・五×横二四・五糎。外題に「伊弉諾流 佛法式次第」(題箋貼付、自筆・墨書)、内題に「伊弉諾流式次第 仏法の作法 押加持祈禱の内 霊偈はづしの項より伊弉諾流に古代より伝わる仏祀り法」と記されるが、内容より『仏法の作法』と題を認定し、紹介する。

目次は次のようであり、内容が知られる。

- 一、霊偈はづしの説明
- 一、仏事に依る祈禱の準備、字文
- 一、本尊がけの字文
- 一、霊鬼を、幣束に呼集める字文
- 一、成仏して居る仏人の霊を、仏の国へ送る法文
- 一、成仏出来ておらない仏人、就仏さす字文
- 一、1、人地獄さらえ和讃      2、釈迦讚念仏
- 3、弘法大師の掟て念仏      4、月割経仏の渡し

- 5、十文渡ししの念仏
- 7、過去聖霊正覺
- 8、安心和讃
- 一、仏様を取分け祀の法
  - 此の作法、他所にはない仏祀りの作法也り。
- 一、先祖の墓を、改葬する作法しだい
- 一、七山和讃
  - 仏を呼んで、祈念祈禱の時に使ふ字文。塚起にも使ふ。
- 一、地獄さらえ和讃
  - 塚起の時に必要な字文、是も他地方にはない。
- 一、石碑を新しく建てる時の作法
- 一、石碑を処分する作法
- 一、本尊祀り及び
  - 仏事を行った後で鎮めの字文、師傳の法文
  - 此の書、仏事に応用、出来る、古式の法也
- 一、神道葬祭作法
- 一、神道法による年祭
- 一、百萬遍念仏供養の起源と修法意儀に示つての作法と、説明

一、物部の奥地に傳わる盆祭りの作法

本資料は、死霊・祖霊に対して行われるいざなぎ流祈禱の諸作法の説を主たる内容とする。

いざなぎ流は、近世期に当地で活動した「博士」と称する宗教者による病人祈禱を起源とすると考えられ、病人治療の祈禱は重要な位置にある。

病氣は、山の神や水神、あるいはその眷属、呪詛——人の怨み、憎しみ等——、祀られない死霊や、適切な祭祀を受けない先祖の霊等々が取り憑いて苦しめる状態と理解されるが、こうした原因を判じ、取り憑いた神霊を除く祈禱として行われる基本的な儀礼が「押加持祈禱」である。この中で、取り憑いている神霊が何かを伺う「門はずし」が行われるが、特に山川で不慮の死を遂げる等の理由で、祀られず怨みを抱いた「キエウセン亡者」が取り憑いていないかを判じ、これを除去する作法として行われるのが「霊解はずし」である。

本書には、まずこの霊解はずしについての作法の詳細が記される。

興味深いのは、死霊ばかりでなく「山の魔群・川の魔性」はじめ眷属たちが、病人の体に取り憑いて「よれてもつれて」遊んでいるとの認識のもとに祈禱が行われることで、これらに関しては、病人の体からはもちろん、死霊とも「取り分けて」、相応の供養をした上で、もとの棲みかに送り返す作法を行う。

死霊に関しては、「西方九品が浄土、仏の国」へ渡るよう祈禱を行い、「地国ざらえ和讃」「釈迦讚念仏」「弘法大師の掟念仏」「本尊渡しの念仏」「安心和讃」等を唱え、死霊を慰撫し、浄土へ成仏させる。

しかしながら、体の一部が特別に痛むような症状がある場合には、その同じ箇所が痛んで死んだ死霊が取り憑いている可能性が高く、こうした際に「病疫神祓い」なる特別の祓いを行うこともあるという。

ところで死霊ばかりでなく、墓に葬られ供養されているはずの祖霊が

家族の者に、病氣や怪我、事故などの不都合をなすこともあり、こうした場合に行われるのが「仏の取り分け作法」である。

これは占者によって、先祖の供養が不十分であることが原因であると判ぜられて、知られるところとなるといい、あるいはまた、長い間、先祖供養を怠ったがために、子孫が夢告等により供養の催促を受ける場合もあるという。

子孫に祟りをなすような先祖は、死後百年を越えて、名もわからなくなった大先祖の霊であることが多いというが、こうした死霊の場合、長い年月の間に、墓所に山ミサキ・川ミサキをはじめとする「魔群」「魔性」が寄り添い集まり、ともにとどまるようになる。

災いが生じるのは、これらの諸眷属が「汚らい不浄」となって、施主の供えた供物を掠め取る等の障害を及ぼすからで、従って、先祖の霊の供養に先だって、これらの魔群・魔性たちを先祖より切り離し、「山のモノは山へ、川のモノは川へ」それぞれ本来の棲み処へ送り返す儀礼が必要となるわけである。

御幣として、荒神・山の神・水神・六道・呪詛・天下正・祓い幣等が作られ、供えの米を入れた円桶に立てられて、祈りが行われる。特に六道ミテグラには、大先祖の墓所を始めとする、家の全ての墓の立つ地の土が少しずつ集められ、その内に入れられるが、これは眷属に先祖の霊との縁切りをしていただくにあたってのみやげとして供えられるものである。

眷属・精霊を取り集めた幣束は、紙に包み縄で括って荷として取りまとめられ、祓い・送り鎮めが行われた後、続いて行われる先祖の霊の供養儀礼の中で、土中に埋め鎮められる。

先祖の供養が行われるのは、祖霊の祀られる墓においてで、各墓に水札を立て、卍札を拝み石——線香・供物等を供える墓前の石——の下に埋めて鎮めの上印とし、さらに供養柱を一番古い墓の後ろに立てる。こ

の際に、取り分けをして荷にまとめられた幣束類が供養柱の下に埋められ、その上に石が乗せられ、五印鎮めによる鎮めがなされて封じこめられるのである。

取り分け作法は、いざなぎ流においては一般に、日月祭、オンザキ神等、家の神祭りや神社の大祭等において、祭りの正常な進行を妨げる諸精霊を除去するために行われるが、この場合には、まとめられた幣束は人の立ち入らない山中に埋められたり、川に流す等の方法がとられる。

仏の取り分けにおいても、茶碗を叩き鳴らして呪詛幣に呪詛神を集めるといった特徴的な作法が行われるが、祖霊が原因となる病気の治療儀礼の一環として、諸精霊を取り集め荷にまとめられた幣束を墓所の供養柱の下に埋めるのは、通常の取り分け作法の応用として理解できよう。

本書にはまた、墓の改葬の方法が記される。興味深いのは、祖霊を移すために行われる「塚起こし作法」である。

墓中に眠る祖霊を呼び起こすために行われるものであるが、本作法は、本来、いざなぎ流において祖霊を家の守護神（ミコ神）に転生させるための「取り上げ神楽」で行われる儀礼である。墓前において「斎幣」と呼ばれる特別の御幣に祖霊を移す点も共通しているが、こうしたいざなぎ流に特徴的な作法を核として儀礼が構成されている点、看過できない。ほかに本書には、神道葬祭、年忌の祭、百万遍念仏、盆行事の作法等について解説される。

山深い物部の村には、至るところ、諸所に数多のミサキ、魔群・魔性が棲息する。これらの中より、祀り供養すべき精霊を他からより分けることが、儀礼の上で少なからぬ部分を占めるが、こうした点、また、より分けられた精霊に対する祭祀、供養を行う点に、地域環境に根ざしたいざなぎ流祈禱の特徴を認めることができよう。<sup>(2)</sup>

註

- (1) 豊孝大夫記の資料群中には、「押加持祈禱」についての一冊が収められる。
- (2) 拙論「死霊・祖霊をめぐるいざなぎ流御祈禱」（福田晃古希記念論集刊行委員会編「伝承文化の展望―日本の民俗・古典・芸能」所収、三弥井書店、平成十五年一月）参照。

〔凡例〕

- ・字体は、正字・異体字・通行字等、でき得る限り、原文に近い字で翻刻した。
- ・行取りは、本文の改行箇所を尊重しつつも、内容に基づき適宜改めた。その際、唱え言等の詞章は原則として、一字下げ、または二字下げにして、その箇所が明確になるようにした。
- ・改丁行を、「」によって示し、その下に丁数を記した。ただし、文中の途中での改丁の場合のみ、あわせて翻刻文中に改丁箇所を／によって示した。
- ・句点、読点は、原文を尊重しつつも、意味、内容に基づき適宜改めた。その際、(中点)に改めた箇所も存す。
- ・原文には、見出し点として◎ ○ ○ ・やこれらに類するいくつかの記号、及び、○囲み数字等が使われている。これらは、朱・墨両様あり、また細竹の断面で印したものの、筆記したもの両様が混在する。これらを正確に区別して再現することは困難であり、でき得るかぎり近い記号によって翻刻した。
- ・末梢文字は、原則として翻刻せず、抹消文字が存することも示さなかった。
- ・原文は、現代の用字とはことなる、いわゆる当て字が多く用いられているが、ママ等の注記は最小限に止どめた。翻刻者の注記は右脇に( )内に記した。

昭和五十五年国重要文形文化財指定  
伊弉諾流式次第

仏法の作法 押加持祈祷の内

靈偈はづしの項より

伊弉諾流に古代より伝わる仏祀り法

平成六年作制本 制紙人得制

香美郡物部村山崎 山崎喜章

手記者 香美郡物部村大柄一四六七ノ一

伊弉諾流伝承者 小松豊孝

七十才

此の本には押加持祈祷の内二本にまとめ得ない分を、書いて有る。

ついでに仏法のしだいを一本にまとめると、伊弉諾

流に、古代より傳わつて居る、仏祀りの作法をまとめた。

寺の住職の知らない様な字文の書して有る。

一部桑の川、小松為繁氏よりのてい供の字文も有る。

百萬扁念仏供養の作法を後から綴ぢそゑて有る。

目次

- 一、靈偈はづしの説明
- 一、仏事に依る祈祷の準備、字文
- 一、本尊がけの字文
- 一、靈鬼を、幣束に呼集める字文
- 一、成仏して居る仏人の霊を、仏の国へ送る法文
- 一、成仏出来ておらない仏人、就仏さす字文
- 一、1、人地獄さらゑ和讃

「扉

「扉  
見返し

2、釈迦讚念仏

3、弘法大師の掟て念仏

4、月割経仏の渡し

5、十文渡し念仏

6、本尊渡し念仏

7、過去聖霊正覺

8、安心和讃

一、仏様を取分け祀の法

此の作法、他所にはない仏祀りの作法也り

一、先祖の墓を、改葬する作法しだい

一、七山和讃

仏を呼んで、祈念祈祷の時に使ふ字文。塚起

にも使ふ。

一、地獄ざらえ和讃

塚起の時に必要な字文。是も他地方にはない。

一、石碑を新しく建てる時の作法

一、石碑を処分する作法

一、本尊祀り、及び仏事を行った後で鎮めの字文

師傳の法文

此の書、仏事に応用出来る、古式の法也

一、神道葬祭作法

一、神道法による年祭

一、百萬遍念仏供養の起源と修法、意儀についての作

法と説明

文中の引きつぎの字文は例文で有るから、他の人に

はてきとうでない字文も有る。

一、物部の奥地に傳わる盆祭りの作法

◎伊弉諾流に伝わる仏法の式しだいについて

先づ押加持祈祷祈りの間はづしのしだいで、靈解はづしと云ふ項目の作法について（押加持の項にはない分）

○靈解とは、キユウ仙亡者の魂魄の事で、山川道海等で、非業の死をした人間で、成仏出来て居ない靈、又は昔し中頃今当代に誦めた塚や墓等、無縁仏の魂しいが相性しだいに病人に取りついて、願いを叶えようとして居る様な状態を云ふ。

又は時として地主先祖で有つたり、其の病人の血縁の死んだ人が、年忘供養がほしいと願つて居る場合も有り、他人の世界の亡者は経文をさづけて成仏させて、仏の国へ送つてやる様に、病人とかんけいの有るものが、年忘供養がほしいと、さいそく不足で有れば、其の場であらない作法で有れば、日を替えて後日に任道作法にしてやる様に願立納速にして、一と先づ病人からはづす様な処置にして祈る。

①、心がまえ 此の場合には、釈迦のコミコと言ひ僧侶に成つたつもりで、ケサも掛けてリンもならず。

②、ミテグラの前に小サイ膳にサカツキ其の他の人物にごはんを三個位い、お茶、水・菓子・果物等を少しツ供えて、香もたける様にと、のえる。

③、先づ前楯後ろ楯に神仏を頼む。  
仏の事をする場合には、本尊様を余計にたのみ様に、こりくばりを祈る。

◎引きつぎの祈り方 汚いけしから

「一オ

「二オ

「二ウ

別儀のしだいでおわしません、神が守目／字文の博士は十六天、何性・何の年の米主病者に時使はれて、祈り始めてござるが、米主病者はかるくの身に重くなさいなんか、りて、苦しみおこりに、さめよも強くにござりて、御祈祷加持よのしだいと、祈り始めて、しだいシタイで米主病者え取りては、五方十二が方からキウ仙亡者、行き相い、来相い、見いりも是有り申さう儀にてござれば、師匠しだいで縁切りおくり祓いの前とは相成り申してござるが、釈迦のコミコの自法自力に相い参らせん、大小神祇、高や仏の御本尊様を御祈祷殿え送り迎えて、たしかな前楯後ろ楯御ん引き次ぎを頼み参らす、十六天にわ、そなわり申してござるが、地神・公神・地

台・土偶荒神・三神屋の神、太小神祇／王竜王様、天忠姫宮、伊弉諾太神、当所氏神、大小神祇、神が守目の前楯後楯の大小神祇師匠の方の大小神祇、村でも一社郷でも一社、国では大社の大小神祇様、三

処は一丁目、キュウ仙亡者のけやはづし式法しだいに御祈祷殿え送り迎えをしまいらする。下り入り用合召されて、釈迦のコミコの、御祈祷文を、相いや叶えて賜われたのみまいらする。

(注 筆者は其の時によりて、もつと澤山神様の名を呼み上げる場合も有る)

本尊がけ

(本尊様を御祈祷しだいえお迎える字文の事。人により処によりて、自分の得手しだいに行ってよいが、其の地方のお寺堂を始に、だんだんと遠くの有名な寺院に／

「二ウ  
広げて御祈祷の御たすけを御願ひする字文で、唯亡者の事をするので御本尊様を引き次にお願すると云ふ本すちと心得えること也り。

◎当所処の氏寺本尊様が楮佐古に、福泉寺正観音菩薩、高の板山不動明王、上池にお薬師如来、神通に大日如来、久保村に十一面観音菩薩、大西に地藏菩薩、笹村には普賢菩薩、正観音、黒代お阿弥陀如来、五堂十一面観音、安丸大日如来、別府阿洲の界に地藏菩薩、田の元弘法大師、柿の火手に阿弥陀如来、市宇古土居、地藏菩薩、別役大日如来、岡の内誓渡寺に地藏菩薩、ももおにお薬師如来／根本屋に地藏菩薩、小浜に観音菩薩、押谷に金剛福寺にお弥陀如来、佐岡にお薬如来、仙頭に光明寺にお阿弥陀如来、地藏菩薩、高尾にお薬師如来、大栃にお阿弥陀如来、中津尾にお薬師如来、頓定阿弥陀如来、弘法大師、中谷川、馬頭観音、拓に十一面観音、庄谷相に地藏菩薩、新四国の御本尊様をこうりの字文で御祈祷殿え、送り迎をしまいらする、時を半時におり入り用合なされて、キュウ仙亡者の取りや納めの式法次第の、たまかな前楯て後ろ立て、御ん取り次ぎをたのみまいらする、しだいしだいに七ヶ所七堂伽藍の御本尊

／様え、行秀のはつほをまいらする、佐古村に太日如来、国分寺に千手観音、一区一の宮の善楽時阿弥陀如来、五台山竹林寺文殊菩薩、セツケイ寺に薬師如来、種間寺に薬師如来、十市村ブゼン寺にお阿弥陀如来、七ヶ所七堂伽藍の御本尊様を、コオリの字文で送り迎をしまいらする、四国八十八ヶ所御本尊

「三オ

「三ウ

「四オ

「四ウ

様、西国三十三番、東シ東国三十三番仲、中国も三十三番、百番伽藍のご本尊様、紀伊の国伊頭郡り、高野山に日本一チメの弘法大師、信洲信野の国善光寺、江戸には浅草寺観音菩薩、二十八山、五十八山、八十八山、二百五十八山、五百八十八山、高山本尊ノ大峯本山御本尊様、三処は一チメに、コーリの字文で御祈禱殿え、送り迎えをしまいらする、大小神祇、高や仏ホトけの御本尊様をは、神道ミチハシ一チの太神で行い請じまいらする。

「五オ

(是より神道の行い文を唱える)

時を半時に御祈禱殿、七十五に相掛ケ向ふ白葉の御幣、ヒケイ諸物え下り入り用合召されてたまわれ布米主病者え五方十二ヶ方より、御本尊様からチカク守りが強くにござれば、御法力で守りはづいて、元の堂寺伽藍え行い上げて賜われ、首ツリ、キウ仙、川流、血子の亡者、他人の世界の死霊、もう霊、ミサキに、行き相来相見入りが強くにござれば、御ん導ミチびきでノ六道御幣え引きや渡いて、黄金の花ベラ花ミテグラえ請じ直いて経文授けて、ザイシヨ願いで仏ホトケの国えと、送り渡いて、身に相ふ御祈禱、相いや叶えて給われ頼み参らする、

「五ウ

○注 是より死靈魂魄を、ミテグラに集める作法字文六道幣を、ミテグラの上にかざしてコキザミに上下しなから少し声を長めに和サン風に唱える。

◎ちかく守マモリが強くにござるか、年忌尋ねでござるか、祈念の尋ねでござるか、御判尋ねでござるか、祈念の忌み月、御判の忌日でござれば、大小御判は並す

え申さん、釈迦のコミコが六道御幣、是れのくらを割りや用合ユウカ任立た、是のりくらえサラノミあそび用合成り給え、死人シニド魂魄たましいノは、今世コジウ此の世で山の魔群、川の魔群、今世四足、米主メヌシ氏子の五尺の体でよれてもつれて、花のごもんのあそびと見えるが取り分けて、山の魔郡は山のとなかえ、川の魔性はお川が七里三千ごうえ、いきれう四足は主人の影え、送り返いてまいらする、米主メヌシ病者の五尺の体だは、今世此の世えシツカとツナギ止めた、死靈魂魄タマスイは取り分けて、六道御幣是れのりぐらえ、よみや集めて字文法文、たいして経文授けて浮びの念仏で、罪てう糶カを拂ふて、仏ケの心で極楽浄土仏の国え、安座の位いに送り渡いてまいらする、米主メヌシ病者の五尺の体だ、有るよの物の御縁を切らいて、ノ六道幣をつたうて、黄金の花ビラ花ミテグラえ、サラノミ集りみあそび用合成りたまえ、

「六ウ

◎注 是より六道御を、ミテグラの後に建てて、山川一切の者にブニアテヒケイをやつて、元の住みかえもどる様に米ツツを投げ入れてまつる。

次に線香を最初は七本建てて。寺の住職は両方に各二本、まん中に一本建てて決りが有る。此の時に焼香供養を唱えれば良い。

次に仏法のけがれ祓い作法。マツ香を少量手の平において、手を合せて字文と共にスリ合し、字文終りて自分の体にかける。汚消の字文

◎ゴボン ホツシンをマエナシ給エ(三回くり返ス)  
ゴボン ホツシント イツパカイデウ エゲタツゲ

ダツ チケンの印と開カセ給エ(ココデカムル) 「七オ

次は仏法の被い ズズおもみ乍らに唱える

◎ゲンイースウクンデーフウキウーホオク シイクー  
ゴンデンイーシユウ サンガイ経 シンブドウ シ  
イソンプー サアモオコウ サアモオコ ホロンジ  
ヤーホロンミー

○注、かねを打ち始に唱える字文

◎セジヨウボオ、シヨメツ ユイジュン ユウメツ

ユウラクメツ 法解力、打チャ開クゾ カネノヒダ  
キニ ユメサメテ アウンノ二字を聞クゾ時 キミ  
ヨウ ウン ウン ウン

○注 右三回くり返し乍ら、金を打ち乍らかるくおがむ。

是より先は折り本に記して有る通りに

①、開経偈 終りて何の為に何をするかを唱える

②、ザン悔文 ③、三帰 ④、三竟

⑤、十善戒 ⑥、発菩提真言 7、三摩耶戒真言

⑦、弘法大師真言 ⑧、十三仏の真言

般若心経(くり返し唱える、是は迎えた本尊様に廻向を兼ねて、祓い清の意味にて)

○注 是より先はキウ仙亡者、病人に憑いて居ると思われ  
る霊に対して、経文を授けてやるから病人の縁を切つて、  
うかびて、浄土の仏の国へ渡る様によみ分を唱えて言  
いきかして、般若心経、観音経、光明真言、其の他に  
是と思ふ経を唱えて、身肌の縁を切らいて、三尺四面を  
一チの休場で、西はサイ方九ホンが浄土仏ヶの国を渡る  
か、クジで伺つて見る。行けると成れば米をやつて、す

「七ウ

べての縁切を祈つて、御祈殿を送り出して、後は上印に

舍利札を数回掛て、靈解はづしは出来た事に成る。出来  
ねば何故かを調べて、祈禱に相ふ様な祈り方を考えて  
見る。

靈解附の病人祈禱の時に、其の病人が特別にいたむ処  
がある場合、憑かれた霊が其の処がいたくて死んだ人の  
場合も有り、そんな時には病役神祓いで祓ふて縁切りを  
せんと行かん場合も時には有ると心得るべし。

次に父小松達吾傳の仏けを送る時に使った和讃を記す。  
ボン彼岸、ハシリはづし等、仏けをうかばして送るに  
良い経で有る。和讃、詠歌風に唱える経也り。

◎此のなる金と申するは、銅ばん金で、八幡奈落え  
びゞき渡るぞ、いとしよ、此のなる金の、ひゞき  
に、ゆめさめて、永ごう安らか気心解て、仏ヶの  
心で浄土え渡り賜や、いしとよ、此のなる金と

「八ウ

申するは、死出の山地の、とぎと成る、さいが川原  
のとぎと成る、願以此功德 普及於一切 我等與  
衆生 皆共成仏道 南無阿彌陀仏、南無阿彌陀  
◎舌ちいち光明遍照十方勢至観音の念仏の頂上の光明  
には、(コ、は文語体にて) ◎印

1 ◎上は、宇長の雲の空、下は八幡奈落が其のそこ迄の  
日にちのしよめんに、むねのれんげが開くなら、  
開いた花をば、かさし差し、つぼみし花をはお  
手に持ち、花の枯ほこつえに突く、  
②△願くば阿弥陀如来導き給え地藏尊、一片唱えて三百  
三十三べんに相掛向ふ 弘法大師の掟ての念仏 南  
無阿彌陀仏 南無阿彌陀

「八オ



□①の文をくり返し ②の所は六百六十六ぺんに唱える、  
「九オ  
◎1の所をくり返し唱えて、◎2の所の字文、三回唱えて九十九へん千巻経に相い掛ケ向ふ

弘法大師の掟ての念仏、南無阿弥陀仏 ナムアマミダ

◎此の念仏と申するは、法事供養に会たより、年忌ぼだいに会ふたより、茶湯御前に会ふたより、彼岸祭りに会ふたより、ほんの祀りに会ふたより、千体流に会ふたより、うかびのねぶつと唱り、え手向た、一んしようかびて、五しよはさづかり、しゅうねつ、けむりもさめ行き、罪てう糶も拂ふて、仏ケの心で浄土え渡り給え よいしとよ、◎一切消メツ南無阿弥陀 二切消メツ 三切消メツ 四切消メツ 五切の消メツ南無阿弥陀 ナムアマミダブツ ナムアマミダ ガンニシ、クドク、フキユオ、イツサイ、ガトウヨ、シユジャウ、カイグ ジャウブツドウ

◎死出が山には五処車、五所の車に召しりて、地藏菩薩が梶を取る、じでの山路を打ちこえて、サイが川原に五処の舟、五所の舟には、打ちのりて、地藏菩薩が梶を取る、木ヶ経が山をはほに巻いて、サイの川原は押し渡る、◎インパー、サンパー、オドロンパー、迷故のジヨウモン 南無阿弥陀仏、ナムアマミダ

◎送りの筆には、念仏唱えて経文授てまいらする、上え引いたる、其の筆が、九ホンが浄土針の地国を渡る道、下え引いたる、其の筆が、八幡地国え、おちる道、中かえ引いたるその筆

「九ウ

が、極楽浄土え、渡る道、中え引いたる其の筆、渡り給よ、いとよ、ナムアマミダブツ ナムアマミダ 願以此功德 普及於一切 我等與衆生 皆共成佛道

◎お茶もサカツキ、水モサカズキ、七ちばいの茶湯ごぜんもすわりたり、トオロの御膳もすわりたり、あの世此の世の界いにわ、香のけむりも、立ちわたる、安楽仏 南無阿弥陀、三ツ子の作りし、笹舟が、今のり出すぞよ、のりやおくれな、のりやはづれな、いとよ、死出が山には、五処車、五所の車に、召しりて、死出が山おは打ちこえて、サイが川原に、五所の舟エ、五処の舟には、召しりて、サイが川原を押し渡る、ギャテイの波ぞ立つ、三尺四面に早や着き候ぞよ、中え引いたる其の道え渡り給よ、西はさい方観音極楽仏ケの国土ト渡り唱よ 南無阿弥陀 ナムアマミダブツ、ナムアマミダ (おぼんには、無縁仏も来て居るから、此の経も必要かも知れない)

◎成仏して居らない死人を成仏さす法  
始めの作法は、前に書いた式しだいと大体同じ。  
供物が少し多くする事。ミテグラ幣は不用。六道幣位いは建ると良い。  
唯、引次やよみわけの字文が、成仏して居ない亡者を成仏さす祀りをする由を告げて、こりくばりをする。  
しかし押加持祈祷で霊解はづしに使ふと思ふ時には、引き次だけ行つて、本文に移れば良い。

「一〇オ

「一〇ウ

神そうにした者が本座について居ないと言ふ時には、一度本尊様にたのんで仏ヶのザにもどして色々供養して、出来たら、神のザに直いて安座アサザに着ける。仏の場合は三尺四面を、安場で仏の座につける。神の場合、氏神様、仏の場合、氏仏及びそのミナクチを得にたのむ。

「十一オ

安心和讃は出来てから唱えるもの。  
又年忌祀りや成仏出来て居る仏に対しては使わない。

○地国チクニざらゑ字文ジジ（石人亡者とは墓石の事）

石人亡者、せいばく魂タマすい仏ヶ様は、何年何月何日に（月日不明の年には、いくよの昔と云ふ）此の世に生れ来て、何歳に成る時に、今世コノセヨウ今の世ヨの恵みに放されて五穀の三宝に放され、神や仏ヶの綱も切れ、此の世を立ち去る、其の時に、太小氏子は、氏寺住持を使い入れ、改名授ウケづけて、過去帳カクゾウに記て、仏ヶのザツマエ 渡いてござるが、年忌供養の祀りもおろかにて、今だに、成仏叶わず難汁苦汁ナシツクシツを成さると見え参らすれば、太の氏子が告げや伝えて、取りとう立て、小の氏子も心を揃えて、作りの初穂、働き／初穂も、御取り揃えて、供養回向の祀りも差し上げ致し参らすれば、極楽浄土の花園道へ上りませ、早くとも成仏成り賜え、

◎注 無縁仏ヶ等の時には右の文言は替えるべし。

石人亡者 ゑんまが太社の仏の、はんかのカイ道  
八ツの地獄 仏ヶの浄土渡されて、ゴキナイ カイ  
ドウ 地獄の浄土の、仏陀を前に渡りて、わしませ  
地獄仏ヶ様は、確かに ひまを渡りて、確かにひま

を取らいて 今日ケウオの祀りで 極楽浄土の花園道え、御道引なされて、神の浄土 仏ヶの浄土え、早やばや浮びなされて、安ザの位ツキいに就給え 本ザの位ホシにつき賜え、上げてまいらす、上りたまえ、願ガシニシ以此功德 普及フキキウ於一切 等與衆生 皆成仏道

○釈迦讚の念佛

御釈迦如来は、らいしよにおわします、五月廿日においでオシヨリの其の時に、オシヨリが道えと、急げども、西を見れば、日本の雲ほど立ちます、あれこそ、不思議や有難やと、三足戻られて、釈迦讚のさいはいおいでなをりしごせいが舟にめす、法華経の山を帆フナに巻いて、六ツ子の作りし笹舟に、今のりいでる、のりやはづれな、のりや遅れな観音如来、梶カキを取る、阿弥陀如来波を召す、ギャテイ、ギャテイが柁シロを挿して、行くぞのりて浮びて、御渡り召されよ、南無阿弥陀仏（三回返ス）

○弘法太師掇ての念仏

壹イチいち光明遍照十方勢至観音の念仏／観音の頂上テオシノウには、上は字長の雲の上、下は八幡奈落の地の底迄ソコの日々の正明に、むなのれんげは、たゞひらく、開いたはなをばかささし、つぼみし花をば御手に持つ、花のかれほこ杖シヅメに突く、願わくば阿弥陀の浄土に導き給え、地獄にて、是を壹イチ唱ふれば、三万三千三百三十三度に、相掛け向ふ、弘法太師教の念仏、（南無阿彌陀仏 三返かえす）  
南無大師遍照金剛（三返）南無帰命阿弥如来、仏前心経なし給へ、思わくの身をすて、御神明げ

「十二ウ

「十二オ

樂の体を得て、六体げを成る徳を得て、変徳すいご  
ん父母のぐに、念修しんごうの上に、十善真言 南  
無阿弥陀、々、々、千部の経を唱えたよりも、千体  
供養をしたよりも、千体地藏流をしたよりも、千  
日ザラシをしたよりも、浮ウカヒの念仏と、唱えたむけ  
た、浮ウカヒて、浄土え渡り給え 南無阿弥陀仏 三返

○月割仏ケの渡し

正月、月に死したる亡者は（不動様の御手に祈り渡  
ス）

二月、月に ッ ッ 普賢菩薩の御手に祈り渡ス

三月、月（同）釈迦如来の御手に（同）

四月、月に（同）文殊菩薩様（同）

五月、月に、（同）アシユク如来様（同）

六月、月に、（同）彌勒菩薩様（同）

七月の月に（同）観音菩薩様の御手に祈り渡す

八月の月に（同）薬師如来様の御手に（同）

九月の月に（同）虚空蔵菩薩様の御手に（同）

十月の月に（同）流観音様（同）

十一月に（同）はせの阿弥陀如来様の（同）

十二月の月に死したる人は、阿弥陀如来様の御手に

祈り渡ス

「十三ウ

是にて、仏ケ渡しもしまいらした、御渡りなされよ、

南無阿弥陀仏（三返）

十文渡し

◎十文渡しも致しまいらする、

一日二日に當る人は、普賢様の「御手にあたりくれば

是も一七日と唱えて、十文渡いた」

三日四日に當る人は、不動様の「同」

五日六日に當る人は、阿弥陀如来様の御手に「同」

七日八日に當る人は、薬師如来様の御手に「同」

九日十日に當る人は、虚空蔵菩薩様の「同」

十一日十二日に當る人は、薬師如来様の「同」

十三日十四日に當る人は、地藏菩薩様の御手に当りく

れば、是も十七日と唱えて、十文渡いた、今日の・

開神開ヒラカクミヒラフネト仏に今の祈りで祈り渡いた浮かびて、浄土

え渡りなされよ、

十五日十六日に、當る人は、阿弥陀如来様の御手に

「同」

十七・十八日に當る人は、日流観音様「の御手に当

りくれば、是も十七日と唱えて十文渡いた」

「十四オ

十九日二十日に當る人は虚空蔵菩薩様の「同」

二十一日二十二日に當る人は弘法大師様の御手に

「同」

二十三日二十四日に當る人は地藏菩薩様の御手に

「同」

二十五日二十六日に當る人は文殊菩薩様の御手に

「同」

二十七日二十八日に ッ 馬頭観音様の御手に「同」

二十九日三十日に ッ 阿弥陀如来様の御手に当り

くれば、是も十七日と唱えて十文渡いた、

今日の祈りで開神開仏、今の祈りで祈り渡いてまいら

する。東は極楽、西は地国、久遠クダウが浄土へ花の都えう

かびて渡りたまえや（南無阿弥陀仏 三べん返）

○本尊渡し

本尊渡しもしまいらする、子の年に生れ／来た人は  
「千手観音の「ザツマゑ生れ来て、こんじよう此の世  
を務めて納り行く体だなれども上段・下段に生れき  
て、山川に身を投げ、我身をせつかい召されて、亡  
者に時の行き相いめされて、方角違えて、千手観音  
のザツマゑ渡るが神や仏ヶのザツマに渡り得ず、難  
行苦行をなさるとも」

◎虚空藏菩薩の「ザツマゑ祈り渡いて一生浮びて、  
五性は授り今度はミロク、スイシヨウの御世に会い  
しようぞ、浮びて浄土へ渡りなされよ（南無阿弥陀  
仏 三回）」

○寅の年に生れた人は、虚空藏菩薩の「……」、千  
手観音のザツマ渡るが神や仏ヶのザツマゑ渡り得ず、  
難行苦業をめさるとも、文殊菩薩の／ザツマエ祈り  
渡いた「……」、

○卯の年に生れた人は、文殊菩薩の「ザツマゑ……」

◎辰己の年に生れた人は普賢菩薩のザツマエ生れ来  
て、今世此の世を務めて、納り行く体なれど、上  
段下段に生れ来て、山川に身を投て我身のせつかい  
なされて、亡者に行相い来合召されて、方角違へて、  
普賢菩薩のザツマへ渡り得ず、難行苦業をなさると  
も、勢至菩薩のザツマゑ祈り渡いた、一切浮五性は授  
て、今度は、ミロク、スイシヨウの御世に会いしよ  
うぞ、浮びて浄土へ渡り召され（南無阿弥陀仏

三三)

◎午の年に生れた人は勢至菩薩のザツマ「……」、

大日如来のザツマエ「……」

○未申の年に生れた人は、大日如来のザツマエ生れ  
来て「……」、不動明王のザツマエ祈り渡いて  
「……」

○酉の年に生れた人は、不動明王のザツマエ生れ来  
て、「……」、阿弥陀如来のザツマエ祈り渡いて  
「……」

◎戌亥の年に生れた人は、阿弥陀如来のザツマエ生  
れ来て「……」、千手観音の菩薩のザツマエ祈り  
渡いて「……」

是にて、本尊渡しもしまいらす、此の鈴のひびき  
について、浮びて浄土へ御渡り遊ばせ給え（南無阿  
弥陀仏3カイ）  
引導渡しもしまいらす、東し千里、西千里、北千  
里、四千千里、七里が内に出家なくして、只今釈迦  
のこみが時の使われで引導渡すぞ ウンジュウモ  
ンナア、高田明院菩薩土ちデンデンと納り行く体な  
れども七ツ借り／たる借りみぢかい 両眼マナコは  
日天如来へ戻して、息は風に戻いて、血は水に戻し  
血スデは草に戻し 骨は石に戻し 身体は大地に戻  
し、何故セギヨウに 身体無く共 仏ヶと成り 神  
と成り、一切浮びて五性は授り、今度はミロイスイ  
シヨウのみよに会いせ給え、念仏唱えてまいらする  
是受取りて、極楽浄土へ渡り給え 壹一チ光明遍  
照十方世界セビロシヤノウ光明念じる所を照らされ  
給え（ナムアミダブツ 三カイ）

カンコンジ 功德平等 壹チホツホウジヨヲ 安楽

地獄須上念仏（南無阿弥陀仏 三カイ）

一返唱えて、水の地獄の罪消える、

二返唱えて、畜生地獄の罪消える、

三返唱えて、ガキ道地獄の罪消える、

四回となえて、火の池／地獄の罪消える、

五回唱えて、ヒルの地獄の罪消える、

六回唱えて、シュウヘン地獄の罪消える、

七返唱えて、観音地獄の罪消える、

八返唱えて、八幡地獄の罪消る、

地獄々々の罪てう科が亡びて消る、消えてほろびて、浮で浄土御渡りなされ（南無阿弥陀仏と各回毎に三回くり返し唱える）

そもく皆浄滅法 釈滅仏法 地の厚み十万壱千里 天の高廿二十万一千 西を東遠くに候え共 南北近きに候共 蔭陽の月を見開き迷故三界、久遠が浄土えおもむき賜え、

そもく親子の須上も、先祖の須上も、他人の須上も、萬人須上もとも申せ共、上下のツマには字文の御弟子が是より汝の霊には浮びの念仏回向のしだい、は、差上申しまいらす、／魂白ケイトウ七ツの魂水入れて、此の世の魂しい此の世え戻す、幽世の魂しい幽世へ戻す、村にて相性 合い年有りても 相性変り召さるな、須上の変りも須性うつれも致すな、霊のかわり有りても霊替りも召さるな、字文のみでしの云ふ儀のなす事、壱々しだいしだいと、御聞入れを召されて、神の位い仏ケの位につき賜え、香のけむりが諸反に極楽浄土か世界え安座の位いに付き

一十六ウ

一十七オ

給え、本ザの位に付き給え、天偶の位いと上りませ、

オンロギヤテイギヤソバカ（三回）、南無阿弥陀仏

迷故三界、空本来無東西 南北 何度在 阿字千

万十方三世仏 縁無縁乃至法界平等利益 即身成

仏 過去聖靈成覚 カンニシクドクフキウヨウガ

トウヨ衆生皆共成仏道

○注 是よりは光明真言般若心境等其の他、九篠錫杖、

普門品、折り本に在る経文を唱えて、其の場に相う如く

に、よみ分けリカンを析つて、成仏出来たか伺つて見る。

おわりて、

◎過去聖靈成正覺

次に廻向文

我等所修念仏善、廻向極楽弥陀仏。哀愍撰取願海

消除業障證三昧。天衆神祇僧威光。当所神等増

法樂。遷化大師増法樂。七世思所生極樂。本願聖

靈生極樂。上品蓮臺成仏道。聖朝安穩増宝寿。天下

安樂興正法。十方施主除災患念仏。大衆成悉地命

終決定生極樂。面奉弥陀種覺尊菩提。不退轉引導三

有及法界 同一性故證菩提

（再度伺つて見て出来たら次にウツル）

○安心和讃（花の経）

帰明頂来大日尊、八葉四重乃圓檀和、一切如来乃秘

要にて、衆生心地の曼荼也、十方浄土の諸聖衆は、

大日普門の萬徳を、開いて示し尊なれば、密厳國

土の外ならず。青龍阿闍梨の教誡に。菩提を得る

は易けれど。真言秘みつに逢ふ事の。得難き也と演

べ給ふ、二仏出世の中間に。果報つたなく生るれ

一十七ウ

一十八オ

ど、如何なる、宿世の種因にて、解脱の時を得たりけん。五濁悪世の此の頃も、上根勝恵の者有りて、如説に修行する時は、正像末の差別なく。一念一時一生に、三密加治の不思議にて、無盡の功徳圓滿し、即身成仏せらるなり。下根劣恵の友族も、決定諦信いたしなば一度神呪唱ふれば、無土を除くと説き給う、一密怠たる事無くば。増上縁の力にて、三密具足時き至り。終いには仏果を證すべし。過去に造りし報いにて、亡聲・暗啞の輩に、生れて法門きく事も、唱ふる事も、成らぬみは、諸仏の慈悲にも漏ぬべし。かゝる衆生を杓ふには。他力の法便勝れたる、真言陀羅尼にしくはなし、中にも光明真言は、諸仏菩薩の総呪にて、一字に千理を含むゆえ。無辺の功徳備われり。信じて唱ふる吾々は口称の功力を因として、往生淨土と一筋に。安心決定いたすかし。

「 十八ウ

南無大師遍照尊（三返する）

願以此功德 普及於 我等與衆生 皆共成仏道  
過去聖靈成正覺

「 十九オ

○注釈 病人祈祷で靈傷外の次第を行ふ時には、必ずしも此の方法にしなくても、祈り本に書いて有る經文を選んで唱えて、祈りはづいて送る方法にても差しつかえない。要は病人からはづれて立ち退けばよいので有る。

右のしだいは年忌供養には、使はないしだいで有る。  
○仏様の取り解け祀りの法（先づ理由について）  
1、病人が出来て、御先祖がきげんが良くなって、吉日

を選んで、先祖の靈によりそつたもろの汚れ不浄を、読み解取り解け祓い解と云ふ／次第を行った上で御供養祀りを、すると言ふ願立てをして、事を治めてあつた後、  
②、永い間先祖祭りもしなかつた為に、さいそく不足を受けた時

「 十九ウ

③、長年月追善供養の祀りをおこたつた為に、諸人の諸占をつたつてさいそく不足が有つた時、以上の様な時には得定の亡者だけに限つて、祀り供養をするよりも、地岬き、田地の地主、昔、中頃、今当代の先祖一切の、三尺四面黒土御墓え山に棲だる山岬き、川に棲だる川岬、魔群ま性他人の世界のきゆせん亡者、南無スソ神、其の他、もろくの眷属と一ツに成つて、仏ヶの座に安座せず、汚れて居て、氏子の供えた品も分け取りに相ふと言ふ結果に成るので、先祖／以外のものは取り解けて、相いそうて居る余前のものの魂魄靈を、各々の棲みかえ送り鎮めて、仏ヶのザツマをきれいに、日本晴れに祓い清めて、其の上で先祖一切の祀り供養をする。

「 二〇オ

得別に供養の必要のある者に対しては、其の人の分は余分に有る。伊弉諾流に傳わる、仏法のよみ分け取り分け仏ヶ祀りの式次第也り。

此の作法をすれば、終わつた後でお祭をする事を前提としての事で、先祖祭りより先に、よりそうした悪いものを祀り外いて、ジャマ者を祓いのけて、先祖の靈だけにして、追善供養祀りをすると云ふ下た祀りの為で、きれいさっぱりにそうぢをして、御祝い祀りを差し上げると言ふ事で有る。

「 二〇ウ

○祀りを行ふに必要な品物（ヒケイ諸物と言ふ）

①七升（穀物）

②七百分（お金、七〇〇円、七〇〇〇円、一万七〇〇〇円等終わりに七の附く金目）

③三合米

④ワラ七とにぎり

⑤太半紙二十枚

⑥祀りの対照と成る墓の四角の土と、かんけいする氏子の家の四方の土と御金を少し。いづれも極少量（是を、ツ、マ由心揃いと呼ぶ）。山川のものに縁切りの証古に渡す品

⑦幣串用のシノベ竹少々

⑧不用に成った茶ワン一個、五穀ムギ、太豆、トウキビ、ヒエ、アワ等五通の穀物の実、三ツブ宛ていで、小サイ鉄の棒、五寸針でも可、一本

穀物は原則として丸いウツワに入れて、行ふもの也り。

次に幣束の作り法

1、荒神 2、山の神 3、水神 六道

5、呪咀 6、天下正 7、祓い幣

8、六道ミテグラ 花べら

9、必要な時にはツリミテグラ

以上の幣を作る場合、大半の幣を半枚で作らないと、

二十枚では不足する。

○取り解け祈りの式次

①穢れ消し（字文は常の通りにて省略す）  
引き次ぎの字文次の通り

別儀の次第でおわしまさん、釈迦のこみこは

○十六天の氏子仲場之時使れは申して、仏法式法しだ

「二一オ

いで、読み分け取り分け式次第をしまいらするが、  
釈迦のこみこの自法自力に相まいらせん、大小神祇  
御本尊様えはコーリの字文で、よみや起いて送り迎  
えて、たしかな前楯、後ろ楯、御引き次ぎを頼みま  
いらする、

○②コーリくばり、

（作法は、神々の名前はてきとうに、コーリを掛けて、  
主に仏の事を行ふのだから、本尊、名高いお寺等に出来  
るだけ、コーリをかけて頼むべし。

例として、普段に自分の頼む神、自分だけの信ずる神、  
地神公神、屋の神、／其の処の、そののみなくち、氏神  
氏仏に始り、新四国、四国、西国、高野山、善光寺、其  
他の高仏、高山、日月、二体と、ひくい処より高い処  
えと区切りを付けて、コーリの字文で御祈祷殿え迎えて、  
式法しだいを叶えて貰ふ様に祈る。

一チ区切り毎に読み解を附ける事が必要。次の如く

○釈迦のこみこは時使われは申して、住居の上に在位  
申した、地岬、田地の地主、ソオのミナクチ昔中頃、  
今当代の田地の地主、ミホトケ様の三尺四面黒土ミ  
ハカに古るき世年にうつろい申した、汚らい不淨の  
よみ分け取り分け祓い分けの式次第、しだい／＼  
で、追善供養のお祝い祀りも差し上げ申さう沢にて  
ござれば、釈迦のこみこのたしかな前楯で後ろ楯で、  
御ん引き／次ぎを召されて、アダナヒケイを、取ら  
せん如くを頼みまいらす、

○常の如くに、口釈しだいに、そえたり省略したりして、  
よみ分を附ける。

「二二オ

「二一ウ

3、祓い 三通か五通、七通、祓いの字文を唱へる。  
仏の事だから、仏法の祓い、般若、真言を余計に唱へる。

祓いの読み分けは、三尺四面黒土ミハカ及び其処に用意した品物御本尊様の、ザツマを祓う。

④、神仏勧請の次第、コーリクバリの要領にて、順序に神仏の名前を唱えて、一チ区切毎に、のりくら御幣、是のりくらえ、ヒケイ諸物御祈禱殿へ、いとんよ精かに掛りて用合成り賜えと、読み附けて、最後は四秀の歌と、神道の行いに依り迎える。

⑤、御幣解ケの字文と作法、次に荒神下ろし、主祀りの作法。

次に御幣を供えた穀物の中に建てる。

以上はスソの取分の時とだいたい同じ。唯し黒土ミ墓のごゑんを切らいてはそえて祈る。

⑥、ミテグラ祈り、次の様に祈る

古き世年に取りては、数もがずくな、田地の他主、黒土、ミ墓に、三神屋の神、御しんのザツマ、氏子仲場に有るよの品に、山の魔群、川の魔性、御部類眷属、生きれう四足、南無呪咀神、キユウセン亡者が御縁を掛けて、かきや雲いてよも候う共、ゴエンを切らいて、七十五本に相いかけ向ふ白葉の御幣、是れのりくらをつとて、六道御幣、是れミテグラ、黄金の花べら花ミテグラえ、諸願成就集り用合成り給え、釈迦のコミコが座敷の証古に供り申して、ブニ当て授ける、かたえはブニアテ授け、ヒケイよらめ、字文経文授けて、恵合和合で、元の棲みてう

「二三オ

其の方角えおくり返いて、南無スソ神は、スソの名所え送り諷めてまいらす

(此処でミテグラに米を入れて、一時、祀ル)

◎是より、

- 1、恵比須
- 2、公神
- 3、山の神
- 4、水神
- スソ神
- 3、地神

と廻向に祭文を唱える、が此の場合、すべて代替として、提婆流の祭文によって行ふ定と成つて居る也り。

例をエブスの祭文で記しておく。

◎ゑぶす太黒、福の御神、三神、屋の神様えは、三所

はいちめに御廻向しだいに、御本地おんひを元に相

いかけ向ふ、提婆流とて流取りかけて、よみやひら

いて参らする、提婆の祭文

◎注 終わつて、よみ分け集をいのる。／よみ分の

字文はミテグラ祈とだいたい同じ。

終れば、ミテグラにブニアケ米を少量投入して祀る。

以下太いドックまで同じ作法で行ふ。

山の神、水神の場合には、祭文を唱えて定めのみ分、

えん切りのよみ分けを附けて、山の神、水神に道引をた

のんで、ブニアテをやつて、送り出す様に祈る。

四足も同様に。

スソはトオドウ尉門の命に頼んで、呪咀の名所え鎮り

行く様に祈る。

◎最後は伊弉諾大神、トオドウ尉門の命様に廻向に提婆流を上げて、たのんですべての者を、すべての品や処をゑん切りして送り出す。

以下よみ分けゑん切りの字文の例を記す。

「二三ウ



◎古き世年に山に棲んだる魔群、川に棲んだる魔性  
「二四オ

御部類 御眷属 四足 二足に、山のミサキ、川のミサキ、生きれう四足、南無呪咀神、るい士眷属、他人の世界の亡者の霊が、十六天の三神屋仲に、氏子仲場に、三尺四面黒土ミ墓に、山の神、水神、番荒神、村公神、氏神、氏仏ケ様の御神のザツマに、山川千才諸木に、ごゑんを掛けてよも候ふ共、よみやみだいて、六道ミテグラ、是のりくらゑよみやまとめて、字文もたいして、ヒケイもよらめてまいらした、是れ受取りて、八帖ザシキの有るよの品もごゑんを切らいて、山のまぐは山のとなかへ、川のまぐんは、川のたなかえ、生きれう四足は主人の影え、南無スソ神は、スソの杜え、亡者のものは仏けの国え、事を如くに諸願成就／立ちのき用合成り給え  
(是より先は、同じ字文)

「二四ウ

◎注釈 此処で伊弉諾様をクジに伺い出来たと云ふ九字が貰えたら、ミテクラに米を投ゲ祀り出す。

○次には前に用意して有った茶ワンをタタイてスソ神を集める。

○次に今日のごしかたの祓い、次にゆうがの祓いで祓い集めて、幣速を荷物にと、のえる。

次には高田の王子の替りに提婆流にて、送り鎮の上わ印を祈る。五印を打って、風呂敷にツツム。

後の仏ヶ祭に供養柱を建てる場合には、柱の元にうめる。

其の他に有れば、川に送るか、山の人目に附かん場所にうめる。

(以上の事はすでにかいたスソの取り分けの処を見れば解かる) 大同小異で有る。  
「二五オ

其の日の内に仏ヶ祀をしない時には神送り。

◎取り分け祀りを行った後での先祖祀り供養

1、用意する品、供養柱一本、五寸に八尺(出来レバ)

2、水札墓の数枚卍字札も同数

3、小さい供養柱、必要な時には用意

供養柱に必要な字を書き水札も書く。

祭段にお供え充分に供え、水茶も供える。

◎祀りの式しだい

①、コリックバリ

②、祓い、

初めの取り分けの時と、余りかわりはないが、よみ分けの処が時使はれで、地ミサキ、田地の地主様の追善供養祀の式法次第をすと言う字文を、よみ分に附ける処が異なる。

2、仏ヶの勧請

先づ地ミサキ、田地の地主様からソウのミナクチ、

三神屋の神、氏寺、氏神、十三体の本尊ダン／＼に高

仏、高神ツゞイテ／四秀の歌に神道の行いで供養祀り

の、おそなえものえ迎える様に、字文を附けて祈る。

3、主祀りを行ふ(是のよみ分け常とだいたい同じ)

◎此処で次の様によみ分け祈りを附ける

別儀の次第におわし申さん、十六天では、いくよの昔に今んじよう此の世を修めて、土ちでんでんと、しづまり申した、田地の地主、みほとけ様には、ならくならくと落ちやおぼれて、諸人の諸占らをツト

「二五ウ

ウて、御不足御サイそくも強くにござれば、今ま世の氏子は、心ろ揃ふて、追善供養の御いはい祀りも差し上申さう次第にござれば、神が守り目釈迦のコミコは、時使われは申して、先きシヨウトもには、黒ろ土ちミ墓へ、ウツロイ申した汚がらい不浄は、

「二六オ

読み分け／取り分け祓い分けて、日本晴に祓い清めて、本日こんやは、取りとうだて、式の御善も差上申して、御善の上えを、祓い清めて、神道みちはし送り迎えもしまいらしたが、のち々々、御経の数ずも七十五流れ、礼儀廻向に唱え手向て参らす、良き毘びて、御祝祭の御善をおがり召されて、是れ受け取りて、仏ヶの国え安んざの位いに着きたまえ、本んざの位いと上りませ、

是より線香を立て、お経を始めるが、最初に七本立てるが伊弉諾流の定め。

◎仏法の祓い

ゲンイー スクンデー フウキウーホークシイクー  
ゴンデンイー シユウサンガイギョウー。シンブ  
ドラー シンブンブー サアモヲコオー サアモオコ  
オー ホロンジャー ホロンミー

「二六ウ

ズズをもみ作ら唱えておがむ也り。

◎金の打ち始めの経

セモうばうーシヨオメツ ユイジュン ユウラクメ  
ツ、法開力ト 打チャ ヒラクゾ 金ノヒッキニ、  
ユメサメテ アウンノ ニジュン キクゾトキー  
キメウ ワン ワン オン（ワンワンで金を打ち乍らおがむ、三回くり返ス）、

此のあとは、

- 1、開経偈
- 2、サン悔文
- 3、三帰
- 4、三竟
- 五、十善戒

此処で本人の心次第で、先に書いて有る安心和サンを唱えてよい。

又此の先は折本に有る、般若真経、十三仏真言、錫杖経、シヤクマ経、普門品等、どの経でも功力は同じだから、各々唱えたり、又是と思ふ経をくり返したりして充分に廻向する。

もうよいと思ふ時分にクジを見て、すべて廻向が出来たと云ふ事に成つたら、一同におまいりをさす。

氏子がお／まいりをする間は焼香供養、光明真言等を金を打ち乍ら、唱えるもの也り。

「二七オ

次に光明真言を何回か唱えて、氏子一同の安全を祈願して、舍利札で納める。

◎墓での作法

全部の墓に水ツフダを立てる。卍字は拜石の下に、ウメル。御供物も上ゲル。供養柱は、一番古い墓の後ろに建て、取り分けをした幣束は。丸めて其の元に着き、石を置いて五印諷め、及び光明真言。

おまいりを齋ませたら、東南西北中と、五回舍利札。

○次に東方コウザン、夜叉明、南方軍ダリ夜叉明、西方西徳夜叉明北方コンゴウ夜叉明中方には大日大聖不動明王様を行い下ろいて、祀り鎮めの是上は印と、行い請じまいらする、土ちでんでん／鎮り用合成り給え

「二七ウ

と、不動様を頼んで鎮める。墓では余り大声にて、お経

を唱えるものではなく、精かにおまいりするもの、お祀りする前に山川の眷属に別の処え分け前を、やっておいでから、お祀に掛るもの也り。

◎先祖の墓を改葬する式次第

用意する品物

- 1、米八合八勺
  - 2、其の他の供物は適当に、水、塩、線香、
  - 3、各々の墓にサンゴ祭幣、六道幣、一本宛て、
  - 4、一番古い墓にサンゴ祭幣、六道幣、ザイ幣各一本
- 此の墓に供え物を供えて、祭式をする。

◎祭式の式次

1、穢れ消しの字文

△別儀のしだいでおわしません、釈迦のコミコは、当所<sup>シヨウ</sup> 処<sup>トコロ</sup>に鎮り申した、先祖の、浄土を掘り上げ取り上げ／新し浄土に送り迎へて、改め<sup>アラタ</sup>祀り鎮の式法次をしまいらすが、釈迦のコミコの自法自力に相いまいらせん、大小神祇、高や仏ケの本尊様えは、コーリの字文で当所ところえ送り迎へて、式法しだいの前へ楯て後ろ楯を頼みまいらする

◎②コーリくばり、

順序として、処<sup>ジツ</sup>の地神公神、ドツクウ公神、ツカ荒神、方位の神、其の処<sup>トコロ</sup>のソウのミナクチ、山の神、水神、其の処<sup>トコロ</sup>の氏寺、新しく納める土地の氏神、氏寺以下は普段の通。神の分は重用な処<sup>トコロ</sup>に言葉をかけて他はアラ／＼で良い。

コリクバリの、よみ分けは、前記の通りで良いが、処<sup>トコロ</sup>の氏神氏寺様迎える処<sup>トコロ</sup>の氏神氏寺様には、神がたらい

「二八オ

で恵合和合の物相談で送り迎をして貰ふ様に字文を附ける方位の神には、方<sup>カタ</sup>ザワリを致さん如くに、ことわり立てをする。

- ③、祓い清め、錫杖、三ゲ、般若、真言、塩、祓い等を、祓い幣を持って、黒土 ミハカ 御神<sup>ミカミ</sup>のザツマ、ヒケイ諸物のりくら御幣を、祓い清める。
- ④、神勧請、時間を少し省略する必要がある事も有るので、次の法方で行ふ場合も有る。

◎字文

先きしようともには、コーリの字文で当所、処にそなわり申した、地神公神様を元に始めて太小神祇様えは伺い頼ふでござるが、しだいしだいで式のごぜん、のりくら御幣八合八勺、アライネフマを是のりくらで、送り迎おしまいらする、其の御ん為には、神道みちはし一ちの太神で行い請うじまいらする、(是より、神道の行い字文を唱る)

「二九オ

◎願ん立て字文、村でも一社郷うでも、一社国では太社、高かや仏ケの御本尊様をは、三ン<sup>さん</sup>処<sup>トコロ</sup>は一チ目と、三千世界、とう所<sup>トコロ</sup>とこ、のりくらごへいヒケイ諸物え、送り迎えもしまいらしたが、いとんよ精づかに、おり入り影合召されて、是れ先々の式法しだいを相いや叶へて賜われたのみまいらする、

- ⑤ 主るじ祀り作法 常の如くで省略す
- ⑥ 本尊がけ作法

先に記した取り分け祀りの時とだいたい同じ法方。廻向の分は、十三仏真言、般若真経を三回くらいくり返して、唱えるだけで良い。時間がなくなるから。

おわりたら是から行ふ事をたのんで道中無事に、先  
方え移動して、納めさして貰える／ように字文を作文  
して祈る(是れがむづかしい処ろ)

「二九ウ

⑦ツカ起こし作法

先づ小サイ石を取って、むし石の上に置いて起す。  
字文はり印にて、

○セエエリウ、ミヂン ザヂンにソバカ、伏しやオ  
ドロキ給え、ホンコンに打ちや開くぞソバカ 三回、  
ハイリン両手をにぎり内に向けて合す。両親指を、人差  
ユビにつかして親ユビお上にはねる。(オキタカ、クジ  
ヲミテモヨイ)

⑧是より、先祖に対する改葬のよみ分け字文

どお言理由で何にゆえに、何処と言ふ所え改葬するか  
と言ふ事を、作文して祈る。

一ツ例をかく。(例の文)

別儀のしだいによも候わん、釈迦のコミコは御いぜ  
ん様の、氏子どもらに時使われのしだいで御いぜん  
様をは、当所敷地よりどこそ何々様の、お、れら  
敷地、新らしみ墓え送り迎への、／式法しだいの儀  
にてござるが、御いぜん様はいくよの昔しに此の世  
を取めて、土ちでんでんと鎮り申して何人がなん年  
とも、くれ行き申してござるが、氏子どもらは、と  
うしよ処で渡世<sup>よふせ</sup>ミスギが成らいで国に高か越えて、  
いづこの何にと言ふ処で、新らし御門<sup>ミカド</sup>も建てや広め  
てとうせいみすぎの儀にてござれば、是れ先々に、  
御いぜん様えの、足し手の運びだいでせんもうでも、  
太儀と申して、事と切れ、世永に相成る様では恐れ

「三〇オ

◎縁ん切りの字文作法

是より縁ん切り

トウシヨウ敷地に納り申、ミ霊<sup>クマ</sup>は東方／浄土で、山  
の主太神半徳水神、道陸<sup>ドウロク</sup>神様のお、領敷地で、御部  
るい御眷属の山ミサキ、川ミサキ、魔群マ性のもの  
と、よれてもつれてよも候ふ共、御縁を切らいて、  
黒土ミ墓え、集り用合成り給え、マ群マ性のものに  
は、白ろ米<sup>コメ</sup>千石、黒米千石、マ米も千石、三千石も、  
ブニアテ、ヒケイよらめて出まいらした、是受取り  
て、元の棲かに早くに立ちのき用合成り給え  
(米を少々投げる)、南 西 北 中、皆な同じ作法  
東方<sup>トウホウ</sup>、南方<sup>ナンホウ</sup>、西方<sup>サイホウ</sup>、北方<sup>ホクホウ</sup>、中方<sup>チュウホウ</sup>浄土に位置<sup>チイ</sup>り申し  
た、山の神、水神、道陸神様には、御ん礼いれいと

「三一オ

にござれば、当年、世年を良い日と定めて氏子供も  
らは、太の氏子が元に始めて、小の氏子に言葉を掛  
ケれて、物相談も伏せまいらして、恵合、和合の上  
で今日けうは黒土ミ墓え、足手の運びの儀にてござ  
れば釈迦のコミコは、／師匠次第にゑん切りかけて  
地ごくざらゑにかいどうざらゑに、さらゑ上げて、  
三ご祭幣、六道御幣是れのりくらえ引きや渡いて、  
黒土ミハカは大七尺掘りや開いて、取りや納めて  
新しミ墓え安座に附けるしき法しだいの儀にてござ  
れば、御いぜん様は、当所ミはかは、なごり惜しく  
によも候ふ共、氏子どもらの心をき、入れ、釈迦の  
コミコの言ふ事、一チ一チ道理とわかまえて申して、  
良き昆びで国高越えの式法しだいを、相いや叶えて、  
アダナ、ヒケイは取らせん如くを、頼ミまいらす、

「三〇ウ

米<sup>コメ</sup>蒔き上げてまいらする、(米を少少まき上る)

米<sup>コメ</sup>まいたゞいて、良き<sup>トク</sup>むびて御眷属を、ミヒザの元

「三二ウ

は、五方五体十二ヶ方で、生きれう、犬神、四足、

二足、南無スソ神、有縁、無縁の亡者とよれてもつ

れて、よも候う共御縁を切らいて、黒土ミ墓え集り

用合成り給え、生きれう犬神、四足、二足、ナムス

ソ神、亡者のものにも白米黒米マが千石、三千石

とも、ブニアテヒケイをよらめた、是受取りて、元

方角<sup>カタ</sup>え立ちのき用合成り給え、黒土ミタマの御いぜ

ん様は、東方浄土の浄土にござるか、地国にござる

か、高山ほぞんにござるか、氏寺<sup>ウヂヂ</sup>氏仏ヶ氏神様のザ

ツマにござると、千才古木に御縁を掛けてござると、

十ツ方世界にござると、七ツのかいどう八ツかの地

国にござると、御縁を放らいて、御縁を切らいて、三

尺四面黒土ミハカエ諸願成就、集り／用合成り給え、

「三三オ

南西北中、同じ

◎是より七山の和讃と地国ザラエの和讃を唱えて、のり

くら御幣え迎る(金を打ち乍ら)

△黒土ミハカに集り申した、ミタマの御いぜん様をは、

地国ザラエニかいどうザラエを唱えたむけて、のり

くら御幣え、行い上げてしまいらする

◎七山の和讃(和讃の声にて)ズズも持ツ

先づ一チ番に富士の山に登りして、東国<sup>トウゴク</sup>見れば四十

七里有りと見た、み山に叶なわぬ花なれど、しきび

一ト元植えおいて、ちんとこまくらた、への廻向で

よりござれ、

先づ二番目に、紀洲の国大峯山に登りして、富士に

勝さりし山なれど、東国見れば四十七里有りと見た、

ミ山に叶なわぬ花なれど／仏木一ト本植えおいて、ち

「三三ウ

んとこ枕らた、ゑの廻向でよりござれ、

先づ三番目にわ、四国は、石しづち山に登りして、

前は神、後ろは仏ヶ、よろづの罪をくたく石ツチ山、

東国見れば、四十七里有りと見た、ミ山に叶なわぬ花

なれど、ちんとこ枕らた、ゑの廻向でよりござれ、

先づ四番目にビツチウの国、立山に登りして、東国

見れば四十七里有りと見た、ミ山に叶なわぬ花成れど、

ソーバキ ヒトモと、植え置いてチントコ枕らた、

ゑの廻向でよいござれ、

先づ五番目に出羽の国、羽黒山に登りして、東国見

れば四十七里有りと見た、ミ山に叶なわぬ花なれど柳

木一ト元植おいて、チントコ枕らた、ゑの廻向でよ

りござれ、

「三三オ

先六番目には紀洲の国、高野山に登りして、東国見

れば四十七里有りと見た、ミ山に叶なわぬ花なれど、

ハスを一ト本植えおいて、チントコ枕らた、ゑの廻

向でよりござれ、

先七番目にはしもつけの国、日光山に登りして、東

国見れば四十七里有りと見た、深山に叶なわぬ花なれ

ど、なぎを一ト元植えおいて、チントコ枕らた、ゑ

の廻向でよりござれ、

是になびかぬ神もなし、是になびかぬ仏ヶなし

(何々の仏ヶ様) 東方極楽浄土の曲りが七十曲り、

南方弥陀の浄土曲りが七十曲り、西方クホンが浄土

の曲りが七十曲り、北方弥勒スイシヨ曲りも七十曲り、八幡地国の曲りも七十曲り、三尺四面の曲りが七十曲り、信野の国善光寺の／お寺に差し出で、無情の風に打ちふけて、尾根越へ、佐古越へ、谷越へて、よりござれや、地国々々へ告げや渡いた告げのいた。

よみ分け、三尺四面の御縁を切らいて、ザラリとごゑんを放いて、のりくら御幣えかゝりて影合成り給え、

◎地国ザラエ和讃

正月入れば梅の花、七ナ宇根、七ナサコ、七ナ谷、字根々々、サコ々々、谷々迄も咲きや栄へた花なれど、あの世で栄はぬ花なれど、此の世で栄えに栄えて勇みてよりござれ、

二月は椿の花(以下同)

三月入れば桜の花、

四月入ればゴコクの花(以下同)、

五月入ればうの花 以下同、

六月入ればユリの花、以下同、

七月入ればソウバキの花 同

是よりよみわけ

何々ミタマの御い前様をは、／五方五体十二ヶ方のあるよの物の御縁をさらいて、ごゑんを放いて、三尺四面黒土み墓えよみや集めて、地国ザラエかいどうザラエにサラエ上げた、式法次第も差し上げ申してまいらしたが、三尺四面の御へんも切らいて、のりくら御幣、是れのりくらゑ、安座の位いに着きた

「三三三ウ

まゑ。

◎注 ここて九字にかけて伺つて見て、出来たと云ふ

九字を貰つたら、四季の歌、神道の行いにかゝる。

◎御いぜん様には、九字めいけいをうかゝい申せば、

良きよろこびで、のりくら御幣是れのりくらゑ、安

ザについて下されるとのお、せにござれば、四秀の

歌も歌いかけ、神道ミチハシ一チの太じで送り迎を

しまいらする、(四秀の歌神道の行いを祈る)

◎おわりてよみ分け

是迄おあらん限りに送り迎／をしまいらしたが、安

ザの位につき給え、のりくら御幣一チのやす場で、

新しミ墓え送り迎えて、改め納め祀りもしまいらす

れば、氏子どもらに相性相い氏、相人有りても、相

性変りに相性うつれは致さん如に、のりくら御幣に

取り用合成りたまゑ、氏子供等は黒土ミ墓を、七尺

五寸二歩と掘りや開いて、取りや納めをしまいらす

れば、よき毘びを召されて賜われ頼み参らす、

◎注、 此処で石ヒ其の他の墓且を、持つて行つてほし

いか、処分しても良いか聞いて見て、御幣を安全の処に

立ておいて、古いはかから掘り始める。

始にツカ起しをした石墓の四方の土少量ツ、別々に

紙にツ、み、先方の新しい処にもどす。一墓々々九字で

うかゝって見るのも良し。

全部出来たら、もう一度／可否をうかゝって、良ければ

石碑等持つて行けない時には、集めて祓い清めて、字

文法文は、御縁を切らいて、元の御ごぎに安座の位いに

上げる。字文を消して、石のたましいを入れて、うめる。

「三四ウ

「三五オ

◎字文Ⅱ行い使ふた、字文は、南無きゑんにソバカケ

チリンに ソバカ キエンにソバカ 三回

○是天竺、天まのからじよこくより 大岩小岩と、行

い下ろいて、地段国の大岩小岩と、行いかけける、是

のや、石は、大岩小岩と、直らせ給、取り給え、

○次にツカ荒神様を、サンゲ、錫杖、塩、般若真経等に

て祓い清めて、此の場のゑんを切つて、元の位いに上

る様に祈り、

○次に山荒神を行いおろいて、此の場を領じ取らすよう

に祈る

○五印しづめで其の場を鎮める。

一切出来たら幣と骨を入れた箱を揃えて、祓いを唱え

て、此の場のゑんを切つて、タマシイは先に先方の氏ち

寺迄、迷わずに行く様に祈る。

山の神、水神、道陸神に米蒔き上げて、眷属魔群に、

行合い来合に相わん如くに、送り附けて貰ふ様に祈願を

する。

◎先方に着いた時の作法

先づ全部来て居るか聞いて見る。必要と思つた時には

次の字文お唱える。ミタマを移した幣を持つて、

◎字文、先きんよともには、(どこそこに) よう年久し

く鎮り申した(何のミタマ)を、当所処え送り迎え

をしまいらしたが、当所ところに、安座の位いに附

きたまゑ、東方かいまんまんの仏ケたちも、此処で

招ねけば奇りござる、奇りて、わしませ／仏ケたち、

はんぜいわしませミタマたち、南西北中、五方五体

十二ヶ方(以下字文同じ)、神道ミチハシ一チの太

「三六オ

神で送り迎をしまいらする、いとんよ精かに当所と

ころに影合召されて、安座の位いに付き賜え、本座

の位いに着き賜え、てんげの位いと上りませ、(是

れ集らん事なし)

◎各々納めたら、水フダ、供用柱等揃えて、供えおして

祓い。般若心経、光明真言等を唱えて、柱、水フダ立

て、一同おまいりして、舍利札にて、ツカ鎮をして家

にもどつて仏段の前で廻向して終り。

◎注 改葬した時には、始めてのボン月に初ボンの祭り

が必要で有る。折り掛下ウロかテオチン一個でもよい。

又其の日にまいそうの出来／ない時には、家の雨タレ

の処にゾクに云ふ水棚を作り、骨は下に置いて、幣は

上において、供えをして祀り、明日に納める様にする。

式次第やよみ分は、一ツ定のものではないので、其の

時其の場に合ふ様に考案して、とゞこうり無い様に心ろ

掛ける。又数ず有る墓の中で一ツだけ持つて行く時には、

他の墓との縁ん切りも忘れない様に心ろ掛る事。

又改葬せんとする時には、急に決るわけではないので、

心掛けた時点で、其の事を早目に墓前で告げて置くとよ

り良くできるもの也り。

たいていの家に水子の霊も有るのでそれにも言葉をか

けて、いつしよにつれて行く事を忘れない事。

◎石碑を新しく建る作法(瑞魂 磐)

出来れば、雨たれににわむしろを敷いて、一基の場合、

四ツにタタム。其の上に石碑台石等を置いて、一ト元毎

に紙をしいて、米ツブを少量供えて、字文を唱え乍ら金

ツチでしりの方を打つ。重ね石も同じに。 三回宛

「三七オ

「三五ウ

「三六ウ

◎字文 石のすいばくぬきの法

○地に水しすいばく、すいごん たらりやそばか、天に水し水ばく、すいごんだらりやそばか、地の大岩小岩の水いばくは、天んの大岩小岩打って放す、みちんざちにそばか、

次に般若心経等で三回七回唱えて祓ふ。石碑を建てたら四秀の歌、七山の和讃の廻向して、御本尊を迎えて廻向して、祀りをすまして、／舍利札でツカ鎮めを行ふ。

「三七ウ

東南西北中と、五回くり返し唱えると、よろしい。

○参考文献、墓の事を土チクルと言ふ。お堂の事をかしき、穴の事、ソノ塔の事をアララギと言ふ。

○伊弉諾流で行ふ事の違ひは、

①、コリックバリ法

②、祓いをいく通りか行ふ

③、神仏ケを勧請する作法

4、よみ分とか理かんと云ふ字文を作文して唱える。

④、節しめ、ふしめで九字と言つて、可否を伺つて見る作法を行ふ事が定め有る。字文字法を、暗記した上で行ふ。幣束が必要と成つて居て、其の幣がする事により異なつて居る。

「三八オ

日本の他の流儀にはない古代の法で有る。

◎塚起し堂寺祀りの後で鎮の字文

折本に書いて有る。舍利札を五方え唱えた後で、不動明王を鎮めの上印に祈願し、

東方降山夜又明王、南方軍多利夜又明王、西方西德夜又明王、北方金剛夜又明王、中方大日大聖不動明王、立ち法田と立つて、鎮り用合成り給え、

五方にとなえる。師傳の法。是れにて、鎮まらん事、無しと許された。

○仏法にて祀りや祈禱を行ふ場合には般若心経はもちろんの事、其の上に灼摩絡、錫杖経、不動経、観音経等、必要に成る時もある。

神道による葬祭式次第

○一、身潔の祓い 祓戸の大神を祈り、祓い、塩水にて清る

○二、座祓い 大祓い三巻(三回くり返す事)

○三、降神の儀 神勧請 幽事の神(葬儀を司る神)

及び、天祖三柱の大神、伊弉諾大神、産土大神(処

ろの氏神様)

○四、三科の祓い

五、御食御酒献上の詞

○六、婦幽奏上祭の詞(死亡した人の氏名、死亡の年月日を申告する)

○七、移霊祭 此の時に死亡した人の身体を身潔の祓い

三巻以上よく祓ふて霊代(イハイ)に移すこと)

○八、納棺祭 死亡した人を棺に納める事を告る

○九、告別祭 家族一同参列者を席につける

祭文奏上、死亡した人のおいたち、死亡する迄の  
リレキ／を文に作る。別れの詞を唱える。

○十、玉串奉呈 一同に玉串、又は代表者

「三九オ

「三八ウ



○十一、出棺の儀 左え廻る三回。場所がせまい処では棺をまわる。行列おとも 太刀 ホーキ タイマツ (火)

花かご 五行を表する旗ハタ、木は(青) 火は(赤)の旗 故人の弔旗テオキ、御棺、土(黄) 金は(黒) 水は(白) 野辺送りの旗、弓矢、

右の葬列、出棺作法、地域に依り異なる風習を尊重

○引きツ、いて五十日祭を行ふ場合

九、五十日祭の祝詞を捧告する

十、玉串を家族、親族に捧呈さす

十一、位牌を霊社に合祭す

十二、墓地に行き墓前祭、供物、家族一同まいり

十三、帰家祭、大祓い三回、其の他、供養祈り

十四、昇神の儀、神送りをする

○神道式 年祭次第

○一、身潔い祓い 祓い戸の大神を唱え神前を祓い、塩水にて清める。

○二、座祓い 大祓い三巻上げる。

○三、降神の儀 神勧請ユウジ、幽事大神、天祖三神、伊弉諾の大神、処の産土大神ウツスチを迎える。

○四、三科の祓い

○五、御食御酒のりと

○六、幽事の大神に故俗名、何某の何年祭を行ふ事を申告する。

○七、霊前を祓い供養をする (良きとびか伺ふ作法の事 九字も見る)

○八、年忌祭祝詞を奏上する。

○九、玉串を奉呈する。

「三九ウ

○十、墓前に行き供え物をして、墓前祭をして、参拝させる。

○十一、帰宅して、神前を祓ふ。大祓い三回。

○十二、昇神、神送り

各年祭は以上に準ずる。

右は物部村岡の内桑の川、中平ナカヘイ小松為繁伝ナカヘイで有る。

氏は師匠が古代神道の流儀を受けついで居た。吉田神

道、又は橘家(京のチツ家)、又は鎌倉流どちらか有る。伊弉諾流古式には葬儀の式次第は伝つて居ない。

古代日本は葬式は仏の法式がほとんどで、宮中も明治

以前は仏式で有る。現在の神職の作法は古代から伝わつ

ていた神道の法式を、明治政府が神仏分り令を發布する

ときに、神祇りの作法の式次第に国の定めとして採用し

た法式で有る。

平成六年二月十日小松豊孝

○現在神職は葬儀には大祓いは一切使はない。

○百萬遍念仏供養の起源と、信法意儀について

大きな連球のわを、多勢の老若男女が寺やお堂に揃ふ

て念仏を唱え乍ら、連球を引きます作法で、考案された

人は禪宗のお主子ボネさんで天明二年、西暦一七八二年に等

順上人(トウジュンジョウニン)で有る。禪宗信仰で有

る。

目的は色々有ると思はれるが、其の一トツには、大勢

が一同に揃ふて会合エゴウワゴウ和合と、二ツには終戦迄の日本の習

性として、男が上位の社会で女は夫に任せ、姑に任せ、

今で言ふストレスをいっぱい持つて生活をして居た故に、

気晴らしに一ツ時を過す効果も考えての事で有ったと思

「四〇オ

「四〇ウ

われる。

それ故にむづかしいお経ではなくて、すぐにおぼえられる南無阿彌陀仏のくり返して良いとされている。其の上に時々余言をつけて、千遍萬遍百萬融通念仏南無阿彌陀、南無阿彌陀と繰り返して大声に唱え乍ら、右廻りにでも左り廻りにでもひき廻す作法で、太鼓で調子を取る。

「四一オ

等順上人の教えには、融通念仏とは生者も死者も老若男女もお互に念仏を融通しあい、其のくどくを分け相い不足した部分は、お互に融通し相ふと云ふ作法で、大勢で唱える事によりて、皆んなの念仏が相乗（ソウジョウ）効果が生じると云ふ事で、すなはち五十人で一回唱えれば五十×る一ではなくて五十×る五十で二千五百になると云ふ事で、春うらら菜の花の咲く頃、夏のあついな時にお寺の涼しい処、秋の紅葉の一日に思い々に重箱にごちそうをつめて寺に集り、一日の気体／ほね体めを楽しんだと云ふ事で、気まじめに唱えては効果がないので、大声でにぎやか唱える様に考案した作法であると思われる。

「四二ウ

数珠の長さは玉の大きさにもよりて異なるが、いづれも玉数百八個を五連継ぎ合したもので、百八個目に大きい玉を配置して、大きい玉は数に入れずに、五百四十個を一連に継ぎ合しわにしたもので有る。

ズズ玉百八個有るのは人間には多くの心配事、欲望もなやみ事も有り、ずゞを手にして礼拝をすれば、百八の煩惱を晴ら意味が有るしだい有る。

○太鼓は（千ンベン萬ンベン百万ベン ユウツウ念仏ナ

ムアミダ ナムアミダンプツ ナムアミダ）ときき取れる様に打てば良い。

○当地区に伝わる盆の祀りの作法

旧曆にて七月十四の朝早くに、今年生えたま竹か黒竹枝に葉を付けて、十本位いと、萩部竹又ササ竹葉の着いたのを三本取って来て、座敷にござが庭（ミシロ）を二重に折って敷き、其の上に箕（穀物の実と、不用なあくたをさび分ける農具）を置いて、正面を空けて三方より竹の枝の先を、敷物に箕に相わして立て通し、葉の先、交叉して三方から箕の上をお、い、ちがやでく、り止め、更萩部竹を、右、左と奥に立て、みの上で一ツにしてく、り、箕の中にはゞのひろい葉を一ツぱいに敷きつめて、おみなゑし、ゆりのり木等の花を立てまわした竹にく、り付け、位牌を奥の方に立て並べて、十五日の朝まで手を替、品を替えて、供えて供養する。

夕方に（ところのつる）（ソバ粉にて小さいもちを作

り、真中に指先を押しつけてくぼみを作りゆでて）供える。  
つるは供物を、せおって帰る負い縄、くぼんだ形の餅は湯のみに使ふと言ふ。盆やひがん祭りは餓鬼供養の意味も有り、供え物をたくさん供えなければいけないと言也り。

「四二オ

「四二ウ

(二〇〇五年五月二七日受理、二〇〇五年七月一五日審査終了)  
(国立歴史民俗博物館研究部)

「裏表紙

」裏表紙  
見返し